

# 原発避難者 葛藤いまも

## 帰還困難区域 住民票残す人9割

### 関学大調査

#### 東日本 大震災

年へ

東日本大震災から10年になるのを前に、関西学院大

学災害復興制度研究所(兵庫県西宮市)が27日、東京

電力福島第一原発事故による避難者を対象にした調査

の結果を発表した。避難が仕事や収入、家族関係に大

きな影響を与えている状況に加え、故郷に思いをかける

ながらも、帰れない状態に悩む姿が浮かび上がった。

#### ▼34面II 遠い故郷

調査は7～9月、全国の

生活再建支援拠点などを通じ、調査票を郵送して実

施。694人が回答した。

福島県外の自治体から別の自治体に避難した自主避難

者を含めた大規模な調査は初めてという。

回答者の震災当時の住所は福島県内が75%で、元の

住所の現状は帰還困難区域が14%、避難指示が解除さ

れた区域が20%だった。

帰還困難区域に指定されている地域からの避難者は、9割弱が元の住所に住

民票を置いていたが、福島に戻る意向を示したのは2

割にとどまった。住民票を残している理由として、自

由記述で、税の減免があるなど経済的な事情を挙げる

回答があった一方、「長い間、生活していた所から住

民票を移すことには抵抗がある」「お墓や土地がまだ

残っており迷いがある」などの回答があった。

避難は仕事と収入に大きな影響を与えている。震災

前と現在を比べると、農林水産業や中小企業の労務職、自営業が減少。帰還困難区域と避難指示が解除された区域からの避難者では無職と専業主婦が増加。自

主避難者はパート・アルバイトが増えた。世帯収入は300万円以上が減り、300万円未満が増えた。

避難は家族の形も変えた。単身世帯は6%から13%に倍増。配偶者と同居し同居家族が未婚の子どものみの世帯は特に自主避難者で増え、4%から16%と4倍近くに。離婚経験者は14%おり時期は半数以上が震災後だった。(千種辰弥)

# 帰りたいけど…遠い故郷

## 原発避難者、それぞれの道

戻るのか、残るのか。間もなく発生10年になる東京電力福島第一原発事故で故郷を追われた避難者は、複雑な思いを胸にそれぞれの道を進もうとしている。

▼一面参照

### 日本大震災



「事故前に思い描いていた人生と違う人生になった。それが悔しくて」

大阪市淀川区に住む酒井サヨ子さん(77)は2011年3月の事故直後、福島第一原発の20km圏内にある福島県楢葉町から、兄を頼って避難してきた。

楢葉町は亡くなった元夫の故郷で、結婚してから40年間暮らしていた。週3日、老人ホームで洗濯の仕事

福島から県外への避難者

復興庁と福島県によると、ピークは2012年3月時点で約6万3千人に上り、今年10月時点で約2万9千人いる。避難先は隣県の宮城や茨城、首都圏が中心で、全都道府県に広がっている。

「事故前に思い描いていた人生と違う人生になった。それが悔しくて」

大阪市淀川区に住む酒井サヨ子さん(77)は2011年3月の事故直後、福島第一原発の20km圏内にある福島県楢葉町から、兄を頼って避難してきた。

つらい」と高速バスに乗り大阪に向かった。

楢葉町に一時帰宅が認められたのは、事故の3カ月後。避難指示解除準備区域になり行き来できるようになると、春の大型連休や正月に自宅を見に帰るようになったが、家の中は動物に荒らされ、服や家具はすべて処分した。

町下のおけに漬けてあった山菜の塩漬も捨てた。

「近所の人にあけて、喜ばれていたのに」。事故前の記憶も一緒になくなってしまうのが悔しかった。

避難指示は15年9月に解除されたが、住んでいた団地に戻ってきた住民は半数

一時、いわき市内の長女宅に身を寄せていたが、「何もせず、家にいるのは」

「近所の人にあけて、喜ばれていたのに」。事故前の記憶も一緒になくなってしまうのが悔しかった。

避難指示は15年9月に解除されたが、住んでいた団地に戻ってきた住民は半数



福島でやっていたように、土いじりをすると気が休まるといふ酒井サヨ子さん(77)21日午後、大阪府岸本町、遠藤真梨撮影

ほど。田畑には汚染土を詰めた真っ黒なフレコンバッグが積まれ、懐かしい風景は失われた。

大阪は結婚するまで10年

余り過ぎた場所、友人もいる。しかし、浄水場の清掃の仕事の契約期間が来年9月に終わるのを機に、福島に帰ることに決めた。

長女が、元夫が事故後に買って残した福島県西郷村の家で同居しようと言ってきたのだ。

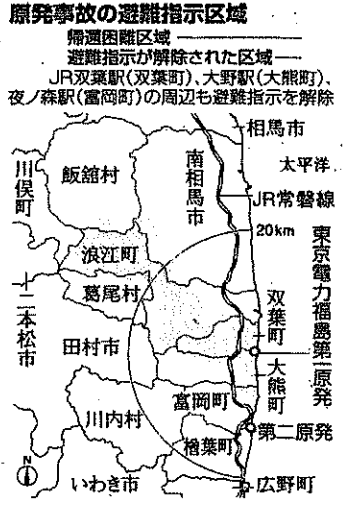
内陸にある西郷村は海沿いの楢葉町より冬の寒さが

## 逆境バネに成長

福島県郡山市から息子2人を連れて避難した熊田朋香さん(45)は、大阪府茨木市の実家で暮らす。

自宅は福島第一原発から約60km離れた避難指示区域外だったが、地震で全壊。実家の両親の勧めもあって

しかし、夏になっても子どもたちは長袖・長ズボンで、マスクを着けるよう求められている。



福島県内に元の住所がある522人に聞く

住民票の所在地は?	福島に戻る意向は?	
	戻るつもり	戻るつもりはない
現在地	200	670
元の住所	193	679
指定なし	201	396
不明		

厳しい。知り合いがいない不安もある。「また一からやり直し。潮の香りがする楢葉町に本当は帰りたい」

められた。休み時間は教室でトランプや折り紙をするように言われ、運動場で遊ぶことは禁じられた。

息の詰まる生活への不満と息子の健康への不安が重なり、10月に再び避難を決意。夫は仕事の都合もあり、残ることを選んだ。

家族が離ればなれになったが、小学2年と幼稚園の年長だった息子は、すぐに関西での暮らしになじんだように見えた。

そうではないと気づいたのは、しばらく経ってからだ。長男が中学校の卒業式の答辞で「友だちと表面上は仲良くできたが、自分を出せず苦しんでいた」と述べたのを聞いた。

次男は昨夏、国語の宿題で出した作文で胸の内を明かした。「父に会いたい思いを母に伝えると悲しい思いをさせてしまっ」

熊田さんは「子どもにいろいろな思いをさせ、それを言えない状態にしていた。申し訳ない」と悔いる。

しかし、高校2年の長男は以前、「建築士になって地震に強い家を建て、母にプレゼントする」と言ってくれた。来春、高校受験を迎える次男は情報通信の技術を学び、被災地の復興支援に役立つ人材になることを目指している。

「逆境をバネに将来に向けて頑張ろうと思ってくれた。避難したことは間違いないではなかった」(千種辰弥)